滋賀大学経済学部附属史料館 にゅうす
S・A・M
２０２４・５・７
No. 60

絵は読み解く

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。経済学部附属史料館は、「滋賀県下における歴史史資料の散逸を防止し、その保存と学術的活用を図ることにより、経済史、経営史及び社会史等の関連諸学の発展に寄与することを目的」とした施設です。史料館には滋賀県の歴史に関わる多くの史料や民俗資料が所蔵されています。その中には、日本の国宝や重要文化財も含まれています。

史料館が所蔵・保管する史資料には絵画資料もあり、そのひとつに「琉球貿易図屏風」があります。滋賀県の歴史にかかわる史資料を所蔵・保管する史料館に、琉球にかかわる絵画資料がなぜあるのかと奇異に思うかもしれません。「琉球貿易図屏風」はある縁があって史料館にやってきました。その縁とは何か知りたい方は史料館に来て職員に尋ねてみてください。

「琉球貿易図屏風」と同じテーマ・構図で画風も似た屏風（六曲一隻）は他に二点現存しています。沖縄県の浦添市美術館が所蔵する「琉球交易港図屏風」、京都大学総合博物館が所蔵する「琉球進貢船図屏風」です。史料館所蔵のものを含めた三点の屏風が複製ではないことは、テーマ・構図が同じであってもその細部が異なっていることからわかります。描かれた時期や描き手が異なるだけでなく、制作の目的が違ったのかもしれません。

史料館蔵「琉球貿易図屏風」の細部に眼を向けてみると、奇妙な点があります。「琉球貿易図」と呼ばれていることから分かるように、この絵画資料の主題は、琉球王国が明国や清国に派遣した進貢船が那覇港に帰ってくる図です。しかしながら、その進貢船の近くでは船漕ぎ競争（ハーリー）がおこなわれています。進貢船に関係者以外の船が近づくことは許されておらず、実際に同じ時におこってはいないはずです。また、競馬の様子も描かれていますが、競馬の時期は進貢船が帰ってくる時期とは大きくずれています。同じ時におこったある出来事を描写したものではありません。

「琉球貿易図屏風」は那覇港に進貢船が帰ってくる様子を描いていますが、そのときに同時におこっている出来事を事実として写したのではなく、なんらかの別の目的をもって描かれたものです。その目的の手がかりはハーリーや競馬にあります。これらは琉球でおこなわれた年中行事であり、琉球の風俗を紹介するという目的が透けて見えます。こうした行事以外にも、様々な建物や場所が描かれています。中国への進貢品である硫黄を貯蔵した硫黄城（ユーワーグスク）、船の塗料に使われた石灰を製造する砂焼所といった進貢船にかかわる場所だけでなく、製塩がおこなわれた潟原（カタバル）、博奕を打ったバクチヤ、芸能に携わる遊女（ジュリ）が描かれる辻（チージ）など琉球の人々の生活も活写されています。

絵画資料は、写真やビデオ映像とは異なり、ある出来事の瞬間や様子を切り取るものではなく、制作者や制作依頼者の意図のもとに構成され、作り上げられたものです。それゆえに読み解く必要のある資料なのです。

（史料館兼任教員　坂野　鉄也）

二〇二四年度（令和六年）企画展□■□■□□■□■□■

「絵とき 琉球貿易図屏風」

期　間：五月七日（火）～五月三一日（金）
休 館 日：土・日休館
開館時間：九時三〇分～一六時三〇分